# 英詩の韻律と音素

島　幸　子*

文学というのは，特定の言語を用いた言語行為の一種であり，その限りにおいては他の言語行為，たとえば日常会話と同じであると考えられる．もちろん文学はそれ自体独特の世界を持っているが，やはりそれはことばの世界である．そこで，言語が科学的に分析されて研究されるようになった今日，文学も客観的な研究の対象となりうると考えることはまちがいではないであろう．

最も純粋に，科学的に，文学と語学を結びつけて考えはじめたのは，構造言語学者たちであったと言えよう．そのうちでも，Harold Whitehallは，1950年代に最も発達していた音素論における成果を，英語の韻律論に応用できるのではないかという意見を，George L. Trager and Henry Lee Smith, Jr., *An Outline of English Structure*, 1951に対する書評で，最初に発表している[1]．その後，彼のこの論文がきっかけとなって，Seymour Chatman, Ronald Sutherland, Archibald A. Hill といった学者たちが構造言語学的立場に立って，韻律論に関する論文を発表している[2]．

音素論によれば，音素には言葉の流れに継続的に配列される分節音素 (segmental phoneme) と，強勢や抑揚のように分節音素の上にかぶさったようにして生じるかぶせ音素 (supra-segmental phoneme) の二種類がある．ここでは，まずはじめに分節音素が詩の中で果たす役目はどんなものであるかを見てみることにしよう．詩の美的効果を盛り上げるための方法として，従来，頭韻 (alliteration)，脚韻 (rhyme)，あるいは子音群 (consonant clustering) があるが，それらは分節音素がある決まった型 (pattern) や群 (cluster) の中で用いられることによってでき上がっている．概して，詩の中では1つの音の現われる回数が，普通の会話の時よりもずっと多いように思われる．それは美的効果のためであり，またその詩の意味内容が強調されもする．たとえば

1　murkey mildewed monument

2　merry mincing madcap[3]

の二つの句を例にあげると，mの音をくり返す頭韻によってこれらの句の意味内容 (lexical content) が強調される．すなわち1の句の陰気さ (dismalness) はm音のくり返しによって，ますます陰気に感じられるようになり，2の句で感じられる楽しさ (gladness) は，そのことでもっと楽しさが増すように思われる．なぜなら，このような短い句の中で同じ音が3回も使われるというようなことは，英語の音素使用度数の確率 (English phonemic probability) の法則では，ひどく嫌われることで，普通の会話にはない驚きと不自然さが表現されるからである．

このように，ある音の現われる回数 (frequency) による効果のほかにもう1つ，音と音との推移確率 (transitional probability)[4] が考えられる．たとえば，"the full ripen'd grain" には〔pndgr〕という子音の連続 (sequence) があって，このような子音群は，その中の各子音の調音点 (point of articulation) が極端に離れているために，早く発音することが困難になり，その句は遅い調子でしか言えなくなる．このような子音群の推移確率は低い (low) といい，この確率が低ければ低いほど，その句の強意 (intensity) は大きくなる，と考えられる．あるいは，密度 (density) が増す，とも言えよう．

次にKeatsのOdeを例として説明しよう．"Ode on a Grecian Urn" の第一連である．

Thou still unravish'd bride of quietness !
〔šst br〕
Thou foster-child of silence and slow time,
〔ns n sl〕
Sylvan historian, who canst thus express
〔lvnh〕　〔nstð〕
A flowery tale more sweetly than our rhyme :
What leaf-fringed legend haunts about
〔nǰdl〕〔ǰnd〕
thy shape
Of deities or rmortals, or of both,
In Tempe or the dales of Arcady ?
What men or gods are these ? What maidens loath ?
〔dnzl〕
What mad pursuit ? What struggle to
〔tstr〕〔glt〕
escape ?

* 宇部工業高等専門学校英語教室

What pipes and timbrels ? What wild
〔mbr¦z〕
ecstacy ?

この連の子音群は次のようである．〔štbr〕，〔nsṇsl〕(and の成節子音を加えると)，〔lvṇh〕，〔nstð〕，〔nǰdl〕，〔jṇd〕，〔dṇzl〕，〔tstr〕，〔g¦t〕，〔mbr¦z〕．

ただ1つの連の中に，このように多くの推移確率の低い子音の固まりが出てくるというのは，偶然そうなったとは考えられない．Keats は発音の困難な子音をわざと集めて推移確率をうまく利用し，このOdeの美的効果を狙ったのであろうと考えられる．

次に．もう一方の音素，かぶせ音素と韻律との関係を考えてみよう．音素論では，英語は4つの強勢音素 (stress phoneme) を持つと考えられる．すなわち，第一強勢 (primary stress) |´|，第二強勢(secondary stress) |ˆ|，第三強勢 (tertiary stress) |`|，弱強勢 (weak stress) |ˇ|である．第一強勢と弱強勢とは，díffĕr のアクセントのある音節は第一強勢を持ち，ない音節は弱強勢を持つと考えればすぐに理解できるであろうし，第二強勢はêlevàtor óperator のような複合語の第一音節に存在する．また第三強勢は，nécessàry の後から二番目の音節につく．従来の詩の韻律は，強弱2つの強勢に基づいていた．この2つの強勢だけで割り切ってしまうと，すべての詩が単調な強と弱とのくり返しのようになってしまう．音素論で認められた4つの強勢のうち，第一強勢は伝統的な韻律論の強に対応し，弱強勢は弱に対応する．詩の中ではこの2つの両極端の強勢が固定し，第一強勢は常に強であり，弱強勢は常に弱である．しかし，その間にある第二強勢と第三強勢とは，隣り合っている強勢音素によって，強になったり弱になったりする性質を持っている．つまり，弱強格 (Iambic) の詩であれば，従来弱強と一律に扱われたものに6種 (|ˇ´|，|`´|，|ˆ´|，|ˇˆ|，|`ˆ|，|ˇˇ|) あることになる[5]．そして，この性質こそが詩の韻律を変化に富んだものにしているのである．

次に一例をあげよう．

Thìs Cíty nòw//dòth like a gárment//wéar

この詩行に強勢音素を付けると上のようになる．この中の This City (ˇ) now// には第一強勢が1つ，第三強勢が2つ，弱強勢が1つ付くと考えられる．ここで第一音節の第三強勢は，詩の中では弱強勢となる．なぜなら隣の音節に第一強勢があるからである．また第四音節はやはり第三強勢であるが，ここでは強強勢と考えられる．というのは，その前の音節が弱強勢であり，そのあとには連接があるからである．(連接については後述する)

このように，第二強勢と第三強勢とは相対的であって，その強さが固定してない．強勢の多様性は韻律において面白い働きをするものであるが，豊富な多様性を持つ詩が必ずしも良い詩だとばかりは言えない．というのは，この多様性には限界があるからである．

たとえば，Longfellow の

As with his wings aslant,
Sails the fierce cormorant,

という二行は押韻していると思われるが，cormorant は córmorănt であって，弱強勢と，aslánt の第一強勢との押韻は無理である．もっと明らかな例は Poe の

Wanderes in that happy valley
Though two luminous windows saw
Spirits moving musically

である．最後の行を音素記号に直すと，

spírits// mûwviŋ // myúwzikliy//

であるが，この詩では

spírits// mûwviŋ// myûwzikǽliy//

という読み方をしなければ，valley と韻を踏まなくなる．しかし，ここで本来なら |-kə-| からほとんど |-k-| となってしまうような音節が，|-kæ-| となるのは不都合なことである．それは言語の枠内からはみ出しているからである．つまり，言語の枠内で各強勢の多様性を存分に用いた詩が，強勢という立場からみた場合の優れた詩であるということができよう．

詩に関係の深いかぶせ音素に，強勢のほかに末尾連接 (terminal juncture) がある．末尾連接には3つの種類があって，たとえば "one, two, three" の one と two の後は声が上がりぎみの調子で読まれ，three の後は下がるが，前者のような場合は二重線連接 (double-bar juncture)，後者のような場合は二重十字連接 (double-cross juncture) がくると考えられ，〔one// two //three#〕のように書き記すことができる．もう1つの連接は，二重線連接と同じような働きをするが，声の調子は上がりも下がりもせず，同じ調子で続く時に存在すると考えられる．これを単一線連接 (single-bar

juncture) と呼ぶ[6].

これらの連接が，どこにどのように用いられるかによって詩はずいぶん異なってくるようである．次にあげる Pope の詩をみてみよう．連接は詩行の中に書き込んでいくことにする．

Tis hard to say // if greater want of skill
Appear in writing // or in judging // ill ≠
But of the two // less dangerous is the offense //
To tire out patience // than mislead our sense ≠
Some few in that // but numbers // err in this //
Ten censure wrong // for one who writes amiss ≠
A fool might once himself along expose //
Now one in verse // makes many more // in prose ≠

このような連接の型 (type) を見，またこの詩が厳格な英雄詩体二行連句 (heroic couplet) で書かれていることを考慮に入れると，Pope の技巧はさらに印象深いものとなる．Pope の詩は，中間休止 (caesura) が重いことで非難されることがあるけれども，連接のことを考えると，それは的をはずれているとしか思われない．なぜなら，連接は休止と同じものではないからである．

これに反して，比較的まずい詩ではこの連接の型の変化が乏しい．お経読みのような印象を聞く人に与えるのは，この型の変化の貧しさのためである．一例をあげると，

When Gentians roll their fringes tight //
To save them for the morning ≠
And chestnuts fall from satin burrs //
Without a sound of warning ≠
When on the ground red apples lie //
In piles like jewels shining ≠
And redder still on old stone walls //
Are leaves of woodbine twining ≠

この詩の連接の型は，単に二重線連接と二重十字連接とを行末に交互にくり返すだけである．

また，次にあげる Tennyson の詩には句読点がたくさん用いられているが，句読点のあるところに必ずしも連接があるとは限らないので，句読点をたくさん用いても同じ数だけ連接を使ったことにはならないのである．

Love took up the glass of Time, and turned it in his glowing hands ; //
Every morning, lightly shaken, ran itself in golden sands ≠

このように，連接の用い方によっても，耳で聞いた場合に単調に響く詩と，変化に富んで面白い詩とができてくる．

以上，英語で書かれた詩の韻律と音素との関係を調べてみたが，優れた詩と言われているものは，それを生み出した詩人が意識的にせよ，本能的にせよ，英語という言語の性質を良くわきまえていたことをうかがい知ることができる．

註 1) "From Linguistics to Criticism", *The Kenyon Review*, XIII, p.710–714 (1951)
2) Seymour Chatman, "Robert Frost's 'Mowing': An Inquiry into Prosodic Structure", *The Kenyon Review*, XVIII, (1956),
"Mr. Stein on Donne", *The Kenyon Review*, XVIII, (1956),
"Linguistics, Poetics, and Interpretation: The Phonemic Dimension" *The Quarterly Journal of Speech*, XLIII, (1957)
Ronald Sutherland, "Structural Linguistics and English Prosody", *College English*, XX, (1958)
Archibald A. Hill and Harold Whitehall, "A Report on the Language Literature Seminar", *Readings in Applied English Linguistics*, (1958)
Archibald A. Hill, "English Metrics: A Restatement". (Mimeographed Edition, 1951)
3) Semour Chatman, "Linguistics, Poetics, and Iterpretation: The Phonemic Dimension", *The Quarterly Journal of Speech*, XLIII, (1957), p.251
4) Ibid., p.251
5) 安井 稔，構造言語学の輪郭，p.133
6) Ibid., p.68

(昭和42年9月10日受理)